九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

我が国の児童合唱文化形成に関する一考察 ： 児童合唱組曲出版数の推移を通して

井上, 博子
小田原短期大学保健学科 ： 准教授・音楽教育学・欧米文化学専攻

https://doi.org/10.15017/2552922

出版情報：総合文化学論輯. 10, pp.13-29, 2019-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

我が国の児童合唱文化形成に関する一考察
－児童合唱組曲出版数の推移を通して－

井上　博子

１．はじめに

1967（昭和 42）年の『合唱事典』では「少年少女合唱団」の項に次のように記述されている。

> わが国における少年少女合唱の歴史はきわめて浅い。戦前の学校音楽のうち、小学校におけるものはすべて斉唱であったし、旧制中学校や女学校においての合唱は現在行われる意味での少年（少女）合唱とは言いがたく、またレコード会社に所属するなどの児童合唱団という名のものもあったが、これも同様少年（少女）合唱であったとは言えない。かくのごとく、音楽の分野における大きな部門のひとつである少年合唱の問題はわが国においては最近まで開発されていなかったが、戦後新しい指導者たちによりようやく昭和 26（1951）年６月、本格的な少年合唱団である東京少年合唱隊がわが国ではじめて創立された。（後略）[i)]

16 年後、1983（昭和 58）年発行の『新訂合唱事典』では次のように記述されている。

> 東日本少年少女合唱連盟と西日本少年少女合唱連盟が母体となって、1981（昭和 56）年に全日本少年少女合唱連盟が発足した。その加盟団体は 1983（昭和 58）年現在 120 団体である。連盟に所属しないで独自の活動をしている合唱団もあって著しい発展を示している。[ii)]

多少補足をすると、少年少女合唱連盟は 1957（昭和 32）年に「全日本少年少女合唱連盟」として創立され、同年第１回全日本少年少女合唱連盟創立演奏会が開催された。だが、地理的な問題などから東日本と西日本が一緒に活動することに困難があったのか、1964（昭和 39）年に西日本少年少女合唱連盟が、1966（昭和 41）年に東日本少年少女合唱連盟が発足し、西と東で独自に活動するようになった。「全日本少年少女合唱連盟」の活動については、２－（２）項で概要を述べるが、新旧合唱事典の記述から 16 年の間に我が国の少年少女合唱団は、著しく団体数が増えたということを窺い知ることができる。1983（昭和 58）年当時、少なくとも 120 団体以上の少年少女合唱団が我が国で活動していた。新訂合唱事典では更に続けて次のような記述が見られる。

少年少女と称していても、少年が殆どいないことも気になる。男子にも音楽は必要だし、合唱団にとっても、あのボーイ・ソプラノの強い声が必要な作品があるのだから、男子が進んで入ってくるような少年少女合唱団が増えてくれればよいのだが（少年合唱団も数は少ないが活動している団体もある)。ケンブリッジ・キングス・カレッジ合唱団やライプチヒ聖トマス教会合唱団のようなボーイ・ソプラノと大人の男声合唱団という編成は、時々試みられてはいるが、日本ではあまり聞かない。子供の世界の音楽だけでなく、大人と一緒に音楽を創っていくことも、子供の成長に役立つのではないだろうか。[iii)]

ここでは、「少年合唱団も数は少ないが活動している団体もある」として、数は明らかにしていないが、少年合唱団が活動していたことが記されている。[iv)]

本研究の目的は、このように、1967 年の合唱事典において「少年少女合唱団の歴史はきわめて浅い」とされた我が国の児童合唱文化形成過程の一端を児童合唱組曲出版数の推移を通して検証するものである。

２．児童合唱団の成り立ち

（１）童謡から合唱へ

本項においてはまず、我が国の児童合唱団の成り立ちについて概観する。

大正期、童謡作曲者たちの作品は、作曲者自身の娘たちや、童謡発表のために編成された団体によって発表されていた。日本童謡事典では次のように記述されている。

児童合唱団：童謡歌唱指導の組織

（解説）音楽には器楽と声楽というふたつの種類があるが、その後者に関して子どもたちを教導する組織、およびそこで結成された子どもをメンバーとする歌唱団体を〈児童合唱団〉という。明治期にはこのような組織は思い付く人もなく、童謡の生まれた大正期には、作曲家の本居長世が娘のみどり・貴美子・若葉を舞台に立たせて自身の作曲した童謡を歌わせたことはあったが、他家の子どもを集めて歌唱を教え歌手育成をするなどということはなかった。しかし昭和初年代に入ると、中産階層の親たちのなかに習い事のひとつとしてピアノや歌唱をわが子に学ばせようとする人が増え、これを基盤として児童合唱団が生まれはじめ、その児童合唱団からラジオやレコードで活躍する少女童謡歌手が育つこととなったのである。[v)]

このような児童合唱団の指導者は、主として童謡の作曲者たちであった。

○小鳩会

小鳩会は、河村光陽（1897～1946 年）が自身の作品を発表するために保持していた。光陽は、1931（昭和６）年に《ほろほろ鳥》を、1934（昭和９）年に《グッドバイ》を発表した。その後、《うれしいひなまつり》、《かもめの水兵さん》などを世に出し、《赤い帽子白い帽子》、《りんごのひとりごと》、《雨傘唐傘》、《船頭さん》など千曲を越える童謡を作曲した。長女の河村順子や小鳩会の歌唱によってレコード発表された。

○赤い鳥少女唱歌会

鈴木三重吉（1882～1936 年）は、1919（大正８）年に帝国劇場で第１回赤い鳥音楽会を開催した。その際に『赤い鳥』の童謡《かなりや》、《夏の鶯》、《あわて床屋》の３曲を披露したのが「赤い鳥少女唱歌会」であった。[vi] 翌 1920（大正９）年に《かなりや》を含む数曲がニッポノホンから発売された。そこでも「赤い鳥少女唱歌会」が歌唱を担当している。この少女たちについて鈴木は、「私どもが童謡を研究するについて貸与されている良家の小さな令嬢たち」と紹介している。[vii]

○青い鳥児童合唱団→クラウン少女合唱団

佐々木すぐる（1892～1966 年）は、東京音楽学校卒業後、教員として働く傍ら《青い鳥》や《じゃんけんぽん》などの童謡を発表した。1923（大正 12）年に《月の沙漠》を作曲した。1924（大正 13）年に自作を主軸とした楽譜叢書『青い鳥楽譜』を創刊し、それを教材に、全国の小学校を巡回して童謡教育運動を展開した。1935（昭和 10）年頃から東京の自宅で近隣の子ども達への歌唱指導を始め、「青い鳥児童合唱団」と名づけた。1939（昭和 14）年に《兵隊さんよありがとう》、1944（昭和 19）年に《お山の杉の子》などの作品を発表した。1964（昭和 39）年に弟子の岡崎清吾が「青い鳥児童合唱団」を改組して「クラウン少女合唱団」を発足させ、現在に至る。

○音羽ゆりかご会

1933（昭和８）年に海沼實によって創設された。海沼實は《お猿のかごや》、《里の秋》、《みかんの花咲く丘》等を作曲した。レコード収録の際には「日蓄兒童合唱團」や「コロムビアゆりかご会」などの名称を用いていた。1943（昭和 18）年に日本放送協会の委嘱を受け、ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌《とんがり帽子》などを担当し、「東京放送児童合唱団」として活動した。戦後の童謡ブームで中心的な役割を果たし、昭

和期の児童歌唱指導の組織の中でも広く名前が知られた組織である。多くの少女童謡歌手を送り出した。1971（昭和 46）年に、海沼美智子が会の指導を受け継いでいる。

○ひばり児童合唱団

1943（昭和 18）年に、皆川和子によって設立された。初期は足柄上郡山北町で春和会児童合唱団として活動していたが、1946（昭和 21）年に NHK の学校放送に出演するようになり、「ひばり児童合唱団」と改名した。1950（昭和 25）年に本部を横浜市鶴見に移し、1951（昭和 26）年にコロムビア専属、1962（昭和 37）年にはキングレコード専属となった。2004（平成 16）年に皆川おさむが代表に就任している。

「作曲家たちはみずから指導する児童合唱団の団員から童謡歌手を育てていった。」[viii] これらの児童合唱団は童謡を歌うことを主とし、童謡作曲家たちはレコード童謡を売り出すために自分自身の組織を必要としていた。戦争中に軍命令によって改名せざるを得なかった合唱団も戦後には元の名称に戻って活動するようになった。児童合唱団の人気が高まっていった状況を長田は次のように記述している。

> 勝抜児童合唱団はすみれ会音楽園に、富士少国民合唱団は小鳩会に、音羽少国民合唱団は音羽揺りかご会にというように、軍命令によった戦争中の変な児童合唱団名が、元の名称に戻っていきました。
>
> 白菊児童音楽園（川上幸平）、すみれ会音楽園（長妻完至）、さくら子供会（保田正）、ミチル児童合唱団（鈴木美致代）、みすず児童合唱団（百瀬三郎）、金の鈴こども会（長谷川堅二）、小鳩会（河村光陽→後に河村順子）、青い鳥児童合唱団（佐々木すぐる）、音羽揺りかご会（海沼実）などです。「（　　）内は主宰者名」。これらの合唱団の子どもたちは NHK の放送に協力し、緑陰子供会で歌い、品川駅頭に復員軍人を出迎えて合唱しました。子どもたちは目を輝かせてくったくなく歌い、その明るい歌声は、廃墟と欠乏の中で傷ついた当時の人びとの心を、どれほど慰め、生きる力の希望を与えたか、本当にはかりしれないものがありました。[ix]

> 美空ひばりの出現や、川田姉妹の圧倒的人気の刺激を受けて、わが子を童謡歌手にしたがる親が急に多くなりました。レコード各社や NHK が経営する児童合唱団は言うに及ばず、童謡作曲家や声楽家たちが主宰する市中の児童合唱団も一大ブームで、どこの児童合唱団も童謡を習いにくる子どもで超満員の異常な繁盛ぶりでした。[x]

レコード会社各社は競ってスター童謡歌手のイメージにあった作品をつくり、童謡の人気は高まりを見せる。だが一方で、このような状況を良いとは思っていなかった識者もあった。谷川俊太郎は、童謡歌手の声を「黄色い声」と表現し、河合隼雄、阪田寛夫、池田直樹との対談の中で次のような発言をしている。

> 昭和の初年というのは、川田正子とか黄色い声の童謡歌手が流行った時代なんですね。そういうのもまたうちの父が嫌がって、絶対レコードなんか買わせなかったので、僕は童謡もあまり聴いてないんです。[xi)]

童謡歌手の在り方や発声法などには賛否があった。童謡を歌うために設立された児童合唱団は一時期絶大な人気を得たが、やがて「童謡歌手のブームは衰退し、童謡歌手たちは姿を消した。」[xii)]

合唱事典には、「昭和 26（1951）年 6 月、本格的な少年合唱団である東京少年合唱隊がわが国ではじめて創立された」とあるが、「本格的な少年合唱団」とは、長谷川の言葉を借りれば「ヨーロッパの音楽的伝統に基づく理想的音楽教育実践のため」の団体ということである。東京少年合唱隊の創設の後、合唱活動を目的とした児童合唱団が次々に創設されるようになる。

○東京少年合唱隊

長谷川新一は、1951（昭和 26）年に、ヨーロッパの音楽的伝統に基づく理想的音楽教育実践のために、ポーロ・アヌイ神父の協力を得て東京少年合唱隊を結成した。1954（昭和 29）年には、専用練習スタジオを新大久保に建設し、1960（昭和 35）年に東京少女合唱隊を結成したが、1964（昭和 39）年の第 1 回北米親善旅行の際に、東京少年合唱隊と東京少女合唱隊を合併して東京少年少女合唱隊となった。東京少年合唱隊としての活動は 13 年で終わる。東京少年少女合唱隊は、長谷川冴子に引き継がれた。

○NHK 東京放送児童合唱団

1943（昭和 18）年に日本放送協会（NHK）が放送合唱団を公募し、前述の音羽ゆりかご会が東京放送児童合唱団に委嘱された。1951（昭和 26）年の放送法施行に伴い、社団法人日本放送協会が解散した後、特殊法人日本放送協会がその事業を継承し、1952（昭和 27）年、NHK 独自の児童合唱団として東京放送児童合唱団が編成された。2003（平成 15）年、NHK 東京児童合唱団に改称され、日本放送協会関連の任意団体として児童音楽番組編成の際に利用するために組織された。『みんなのうた』、『歌のメリーゴーラウン

ド』、『NHK 紅白歌合戦』、『NHK 全国学校音楽コンクール』などの同局の音楽番組、教育番組のほかドラマなどにも出演している。

○西六郷少年合唱団

1955 年、鎌田典三郎（1928－1999 年）は、西六郷小学校を母体とする少年合唱団を創立した。1960 年代には各種の合唱コンクールにおいて優秀な成績をおさめ、NHK 教育テレビの音楽番組『歌はともだち』、『歌のメリーゴーラウンド』などにレギュラー出演した。鎌田は西六郷少年合唱団創立当初のことを次のように述べている。

> 合唱はね、最初女の子だけで始めたんです。どこも同じように。ところが、男の子を何とかね･･･。学校音楽の向上のためには、男の子をやらなくちゃ駄目なんじゃないか、そうした気持ちを持ってたものですからね。何とかしなければ！と考えてた時、ちょうど日本に初めてウィーンの少年合唱団が来たんです。昭和 30 年、いいきっかけだったんですね。それを聴きに行きましてね。ボーイ・ソプラノを初めてなまで聴きました。ああいう声は男でしか出ないんだな、と思って、やろう！と決心したんです。僕は極端なんです。『女の子は休み！』にしましてね。『男だけ、希望者は集まれ！』ということで始め、ソルフェージュをやってたんですよ。それで 3 年･･･。最初はソルフェージュから始めた、女の子のときは、ただ歌わせてたんですが･･･。ウィーンを聴いて、古典的な音楽性を感じさせられてたものですから。若気の至りで、すぐそこに頭がいっちゃって･･･。ソルフェージュをやって、発声をやって、と思ってね。コール・ユーブンゲンを買って始めたんですよ。そうしたら男の子たち嫌がっちゃって･･･。だんだん集まらなくなって頭にきて土手に探しにいくとね、野球してたり、魚釣してるのよね、そこで《やる！と言ったじゃないか！男の約束だろ･･･》と連れて帰ったりして･･･。（中略）それから 3 年、男の子だけで、文部大臣賞をとったわけです。1959（昭和 34）年です。[xiii]

だが 1961（昭和 36）年、西六郷少年合唱団は、まわりのすすめもあって女子を入団させるようになり、西六郷少年少女合唱団となった。東京少年合唱隊や西六郷少年合唱団の例に見られるように、少年合唱団は幾つかの理由で順調に発展しなかった。西欧諸国の場合には教会と結びついた生活の中の音楽があるが、宗教的基盤のない日本では、ヨーロッパと同じような少年合唱団の運営をすることは難しく、その多くが少年少女合唱団に移行していった。西六郷少年合唱団が「西六郷少年少女合唱団」となった 1961 年にビクター少年合唱団が発足した。

○ビクター少年合唱隊

1961 年６月、日本ビクターによって設立された。ビクター音楽産業の専属合唱団としてレコード録音やテレビ出演を行った。1984（昭和 59）年４月にビクター音楽産業が経営撤退し、ビクター少年合唱隊の名前はなくなるが、1985（昭和 60）年４月に株式会社 FM 東京の事業傘下に入り、TOKYO・FM 少年合唱団として継承されている。「狼少年ケン」、「サンダーバード」などのテレビ番組主題歌を歌っていた。

○全国各地に創立された児童合唱団

1955（昭和 30）年のウィーン少年合唱団初来日は、日本の音楽関係者に大きな影響を与えた。「日本にもウィーン少年合唱団のような歌声を」の願いのもと、多くの少年合唱団が結成された。後藤田純生は、次のように記述している。

> このウィーン少年合唱団の来日を契機として、日本でも少年少女合唱団運動が活発になり始めました。昭和 30 年代には全国で 50 あまりの合唱団が誕生しましたが、《ウィーン少年合唱団のように美しい声を持った合唱団作りを目指したい》というのが当時の人たちの合言葉だったということです。[xiv)]

このようにして 1955（昭和 30）年のウィーン少年合唱団の来日後、日本の各地に誕生した数多くの児童合唱団が活動を活性化させていった。その中で全日本少年少女合唱連盟が創立された。

（２）全日本少年少女合唱連盟

1968（昭和 43）年に西日本少年少女合唱連盟第１回発表会が西宮市で開催された。東日本少年少女合唱連盟からは、代表として東京荒川少年少女合唱隊と沼津少年少女合唱団が友情出演をした。長谷川新一は次のような文を寄せている。

> 近年、我が国での児童合唱運動は急激に発展し、技術的にも、その質、量共に国際的な水準に近づいて来ました。省みれば、昭和 32 年、第１回全日本少年少女合唱連盟の創立演奏会が東京で行われてからもう 10 年も過ぎています。その間、全国各地に少年少女の合唱団体がゾクゾクと誕生。ついで東・西が相互に連絡を持ち、別個に少年少女合唱連盟が新しく発足、今日の立派なものに発展したわけです。[xv)]

西日本少年少女合唱連盟第1回発表会における出演団体は14団体である。本大会において広島少年合唱隊が、組曲《ひろしま》を、西宮少年合唱団が組曲《月と良寛》全曲を演奏している。[xvi] 西日本少年少女合唱連盟の大会はその後、1981（昭和56）年の第14回まで開催された。1970（昭和45）年の大阪万博では東日本と西日本で合同出演を行うなど交流があったが、1981（昭和56）年に西日本と東日本が合併して全日本少年少女合唱連盟が発足した。翌1982（昭和57）年に、全日本少年少女合唱連盟第1回高知大会が開催された。1997（平成９）年からは全日本少年少女合唱祭と名称を改め、2019（平成31）年第38回栗東大会まで継続して開催されている。栗東大会の参加団体は36団体である。2004（平成16）年の第23回全日本少年少女合唱祭北九州大会の参加団体は49団体、2008（平成20）年第27回大会36団体、2009（平成21）年第28回大会46団体、2010（平成22）年第29回大会35団体、2012（平成24）年第31回大会38団体、2013（平成25）年第32回大会38団体、2014（平成26）年第33回大会42団体、2015（平成27）年第34回大会33団体、2016（平成28）年第35回大会31団体、2017（平成29）年第36回大会30団体、2018（平成30）年第37回大会33団体というように推移している。断続的なデータではあるが、全日本少年少女合唱連盟の大会参加団体数概要を知ることができる。

全国の少年少女合唱団を県別に紹介する「少年少女合唱団データベース」[xvii]によると、少年少女合唱団の団体数は、2002（平成14）年時点で858団体とされている。1983年には120団体であったので、20年足らずの間に7倍以上に増加していると言える。だが残念なことに少年少女合唱団データベースは、2002年以降更新されていない。2019年現在の総数は不明である。2002以降更新されていないということは、「増加はしていない」ということを示していると考えられる。活動休止や解散によって少年少女合唱団の団体数は減少していることが推測できる。

西日本少年少女合唱連盟加入団体数をみると、1964（昭和39）年発足当時は不明、19年後の1983（昭和58）年の加入団体数は62団体、2017（平成29）年は42団体となっている。[xviii]

34年の間に20団体が何らかの事由で合唱連盟を脱退している。西日本少年少女合唱連盟主宰の大会・合唱祭への参加団体数並びに加入団体数をみる限りにおいて現時点の我が国の児童合唱団団体数は減少していると言わざるをえない。我が国の少年少女合唱団の団体数は、1957（昭和32）年の全日本少年少女合唱連盟の創立を一つの節目と考えた場合、60年余の間に著しく増加し、そして現在は緩やかに減少していると言える。次項では団体数増加・減少の推移を児童合唱組曲の楽譜出版数を通して検証したい。

３．合唱組曲

（１）成人のための合唱組曲から児童のための合唱組曲へ

合唱組曲とは作品全体で大きなまとまりがあり、各曲の間に文学的・音楽的関連性をもって構成された合唱曲集である。全曲を通して上演されることを想定しているが、その中から１曲を取り出して演奏されることも多い。成人のための合唱組曲としてよく知られているものは、1948（昭和 23）年に発表された、男声合唱組曲《月光とピエロ》（堀口大學詩／清水脩作曲）である。

《月光とピエロ》は、第１回全日本合唱コンクール（1948 年）の課題曲公募作品である。清水脩は堀口大學詩集の中から《秋のピエロ》を選び、単曲の男声合唱曲として応募し、課題曲として採択された。《秋のピエロ》が好評を得たことにより、詩集から４編の詩が追加され、《秋のピエロ》も加えた全５曲の男声合唱曲が作曲された。「月夜、秋のピエロ、ピエロ、ピエロの嘆き、月光とピエロとピエレットの唐草模様」の５曲から構成されている。後に混声合唱のためにも編曲された。

1960（昭和 35）年には女声合唱組曲（女声合唱とアルト又はバリトン独唱）《月と良寛》（宮地廓慧作詩／大中恩作曲）が発表された。大中恩は 1955（昭和 30）年に中田喜直、磯部俶、宇賀神光利たちと子どもたちやアマチュア合唱団のために、新しい合唱曲を送り出す目的で《ろばの会》を結成している。《月と良寛》は女声合唱組曲として発表されたが、この中の《月のうさぎ》は、その当時児童を対象として合唱曲が少なかったためか、児童合唱コンクールの自由曲として歌われることが多かった。「手毬、忘れん坊、月のうさぎ、夕やけ、月かげ」の５曲から構成されている。

1963（昭和 38）年に、湯山昭による《小さな目》が発表された。湯山昭は自作解説として、童声合唱《小さな目》について次のように記述している。

> 作曲家が初めて合唱を書くときは四声体による和声法実習を体験してから混声合唱にいくのがふつうだが私は違った。この童声合唱《小さな目》が実は私の合唱作品の処女作となったのである。この曲は 1963 年度（昭和 38 年度）芸術祭合唱部門参加作品として東京放送の委嘱を受けて作曲し、同年 11 月、合唱・ひばり児童合唱団、指揮・田中信昭、ピアノ・小林道夫の諸氏によって子どものための合唱組曲《小さな目》として放送初演された。10 曲の詩はすべて《朝日新聞》投稿欄の《小さな目》に載った約 1500 編の詩から選び出したもので詩にはいっさい手を加えず、原作のまま全 10 曲を書き上げた。1964 年にこの作品が出版されると全国の児童合唱団が競ってこの曲を歌い始め、私をおおいに喜ばせたのだった。あれから 47 年たった 2011 年のいま、児童合唱の古典となったこの曲に限りない懐かしさを感じている。 [xix]

翌 1964（昭和 39）年に NHK の委嘱により「児童合唱と管弦楽組曲《えんそく》」が、作詞：阪田寛夫／作曲：山本直純によって作成され、５月５日の子どもの日に NHK ラジオ第一放送で放送された。「光る、歩く時のうた、おべんとう、城跡、山の上の合唱、家路」の６曲で構成されている。この合唱組曲が発表された当時のことを、NHK の番組プロデューサーであった後藤田純生は次のように述べている。

> 合唱組曲《えんそく》が企画され、初めてラジオ放送されたのは、昭和 39 年５月であった。当時急速なテンポで充実しつつあった少年少女合唱界に、ひとつのエポックをつくるような作品をつくりたいと考えたのが発端である。通例の合唱曲と言えばピースの作品が多いが、ピース中心のレパートリーは、練習においても、演奏会や放送においても、平板単調になり、聴く方の印象も散漫になり易い。そこで、合唱団にとっては、“よしやるぞ”という目標になり聴く方にとっても、大きな感銘を受ける“大作”として、合唱組曲の決定版が求められたわけである。[xx)]

当時急速に成長していた少年少女による合唱の世界に、より強いメッセージを送るために、組曲として構成し、組曲の持つ力に期待していたことを窺い知ることができる。作曲者である山本直純は、「NHK 東京放送児童合唱団を指揮して」として、次のように述べている。

> 童謡や唱歌から出発した日本の児童合唱のレベルがようやく、この高さに達し、富士山でいえば、五合目をすぎて、遂に胸つき八丁にさしかかった事を感じる。･･･（中略）･･･児童合唱に対する、一般の認識や、社会的配慮も未だ乏しい日本の現状で、音楽に懸ける情熱と、子供たちの純粋な夢と希望が、児童合唱の今日の水準を造り上げたと言えよう。[xxi)]

湯山昭の《小さな目》は、朝日新聞掲載の子どもたちの作品からの採択された詞からなり、連作歌曲の形態をとってはいない。一方、《えんそく》は、阪田寛夫に詞によるものである。この点が《小さな目》と《えんそく》の立場を異にする点である。《えんそく》は、子どもたちの遠足の１日を連作歌曲の形態で取り上げたことにより、歌う立場の合唱団の子どもたちの心を捉えた。

（２）児童合唱のための合唱組曲の出版

《小さな目》と《えんそく》以降、児童合唱を対象とした組曲が次々と発表された。タイトルは、「少年少女のための合唱組曲」、「児童合唱組曲」、「子どものための合唱組曲」など様々である。児童合唱のための合唱組曲がどの程度出版されていたかを、国会図書館をはじめとする図書館の蔵書検索や楽譜出版社の出版記録などによって調査した。網羅できているとは言い難いが、全体の傾向を知ることはできると考える。出版月の把握はできておらず、出版年度に基づいている。児童合唱団の委嘱作品で、楽譜として発行されていないものは含まれていない。2019 年５月時点での調査結果は、1960 年代５曲、1970 年代 19 曲、1980 年代 25 曲、1990 年代８曲、2000 年代６曲、2010 年代６曲である。1970～1980 年代にかけては多くの児童合唱組曲が出版されているが、1990 年代からは緩やかに減少している。

児童合唱組曲一覧

1960 年代

・1963 児童合唱のための組曲《小さな目》詩：朝日新聞「小さな目」・湯山昭作曲
・1964 児童合唱と管弦楽のための組曲《えんそく》阪田寛夫作詞・山本直純作曲
・1965 合唱組曲《ひろしま》広島少年合唱隊・広島市委嘱、持田勝穂作詩・森脇憲三作曲
・1966 少年少女（女声）合唱のための組曲《心の花園》小林純一作詩・中田喜直作曲
・1967 子どものための合唱組曲《東北のおもちゃうた》宮沢章二作詩・福井文彦作曲

1970 年代

・1970 少年合唱/女声合唱とピアノのためのエスキース《四国のこども歌》湯山昭作曲
・1970 こどものための合唱組曲《ふなっこ》宮沢章二作詩・山崎八郎作曲
・1970 こどものための合唱組曲《チコタン》蓬莱泰三作詞・南安雄作曲
・1972 児童合唱のための組曲《富士山》小林秀雄作曲・峯陽作詞
・1973 こどものための合唱組曲《日記のうた》蓬莱泰三作詞・南安雄作曲
・1973 こどものための合唱組曲《お菓子のうた》蓬莱泰三作詞・南安雄作曲
・1973 少年少女のための合唱組曲《祭りと子ども》岩河三郎作曲・中村千栄子作詞
・1973 こどものための合唱組曲《オデコのこいつ》三善晃作曲・蓬莱泰三作詩
・1976 児童合唱のための組曲《火のくにのうた》小林秀雄作曲・峯陽作詞
・1976 少年少女合唱組曲《けものたちのうた》宮沢章二作詞・溝上日出夫作曲
・1976 少年少女合唱組曲《平野のうた》中田喜直作曲・宮澤章二作詞
・1976 少年少女合唱組曲《炎とみどり》森脇憲三作曲・天川悦子作詞
・1976 少年少女合唱のための組曲《地球よ・愛に寄せる五つのうた》福井文彦作曲・宮沢章二作詩
・1976 少年少女合唱組曲《小さな目のバラード》森脇憲三作曲・谷口廣保作詩
・1977 少年少女合唱組曲《うずしお》森脇憲三作曲・持田勝穂作詞
・1978 少年少女合唱組曲《山四章》宮沢章二作詞・岩河三郎作曲
・1978 少年少女合唱組曲《町の子の五つの歌》大木実作詞・岩河三郎作曲
・1979 少年少女のための合唱風土記《城下町の子ども》岩河三郎作曲・こわせたまみ作詞
・1979 少年少女のための合唱組曲《佐渡の四季》岩川三郎作曲・中村千栄子作詞

1980 年代

・1980 合唱組曲：少年少女のためのメルヘン《星の絵本》岩河三郎作曲・中村千栄子作詞

・1980 少年少女のための合唱バラード《武蔵野の子ども》岩河三郎作曲・中村千栄子作詞

・1981 少年少女合唱のための組曲《北国の白い旅人たち》若松正司作曲・中村千栄子作詞

・1981 少年少女のための合唱組曲《海の風景》岩河三郎作曲・宮澤章二作詞

・1981 少年少女のための合唱組曲《生まれて生きて》大中恩作曲・宮沢章二作詞

・1982 少年少女のための合唱組曲《くいしん坊の世界旅行》越部信義作曲・中村千栄子作詞

・1982 少年少女合唱組曲《川よ虹と星と》岩河三郎作曲・宮沢章二作詞

・1982 女声（少年少女）のための合唱組曲《小さなホメロスたち》水野修孝作曲・片岡輝作詞

・1982 少年少女のための合唱組曲《四季のソネット》内田勝人作曲・ゆきやなぎれい／伊藤良一作詞

・1982 合唱ファンタジー《友だち》寺島 尚彦作曲・榎木冨士夫作詞

・1982 合唱ファンタジー《動物のカーニバル》榎木冨士夫作詩・サン・サーンス作曲・寺島尚彦編曲

・1983 女声（少年少女）のための合唱組曲《さる》北爪道夫作曲・谷川俊太郎作詞

・1983 児童合唱組曲《日本のあそびうた》越部信義編・作曲

・1984 少年少女のための合唱組曲《光る季節の歌》こわせたまみ作詞・金光威和雄作曲

・1985 児童合唱組曲《やまぐちの子どものうた》岩河三郎作曲・こわせたまみ作詞

・1985 少年少女合唱組曲《野の鳥たちの歌》堀悦子作曲・岡元おさみ作詞

・1985 こどものための合唱組曲《ぼくのたからもん》蓬莱泰三作詩・南安雄作曲

・1985 少年少女合唱組曲《走れ青い風》宮沢章二作詩・小山章三作曲

・1986 少年少女のための合唱組曲《上州のうた・風の馬にとびのって》中村千榮子作詩・岩河三郎作曲

・1986 少年少女合唱組曲《虹とあっちゃん》関根栄一作詞・森潤子作曲

・1987 児童合唱とピアノのための組曲《白馬の海》小林秀雄作曲・小黒恵子作詞

・1987 少年少女合唱のための組曲《大好き地球》平吉毅州作曲・東龍男

・1988 少年少女合唱組曲《いるま野の花と子どもと》こわせたまみ作詩・岩河三郎作曲

・1989 女声・児童合唱《見なれた風景》溝上日出夫作曲・宮澤章二作詞

・1989 少年少女(女声)のための合唱組曲《ファンタジックスペース》坪能克裕作曲・名村宏作詞

1990 年代

・1990 児童合唱とピアノのための組曲《海と山と仲間たち》小林秀雄作曲・峯陽作詞

・1991 児童合唱組曲《空にかいた 12 の童話》村田さち子作詞・池辺晋一郎作曲

・1992 児童合唱組曲《恐竜探検》細江和夫作詩・千秋次郎作曲

・1994 児童合唱とピアノのための組曲《青い地球と子どもたち》小林秀雄作曲・峯陽作詞

・1994 児童合唱のための組曲《銀河鉄道の夜》藤井喬梓

・1996 同声（女声）合唱組曲《ぼくだけのうた》平吉毅州作曲・東龍男作詞

・1997 児童合唱組曲《四季と歌と子どもたち》糀場富美子作曲・峯陽作詩

・1998 児童合唱組曲《ちいちゃんのかげおくり》あまんきみこ原作／江藤康子構成・作詞・ 高山惇作曲

2000 年代

・2000 京都のわらべうたによる児童（女声）合唱組曲《虹の橋》藤井喬梓

・2003 少年少女のための合唱組曲《地球のかぞく》大田桜子作曲・石原一樹／大田倭子作詞

・2004 少年少女・女声のための合唱組曲《あしたの灯》門倉訣作詞・吉岡弘行作曲.

・2005 少年少女のための合唱組曲《宇宙（そら)》上柴はじめ作曲・村田さち子作詞

・2005 少年少女／女声のための合唱組曲《森のいのち》新美徳英作曲・村田さち子作詞

・2005 少年少女のための合唱組曲《のびる》大田桜子作曲・大田倭子作詞

2010 年代

・2010 少年少女のための合唱組曲《雲雀の歌》門倉訣作詞・吉岡弘行作曲（ひばり児童合唱団委嘱）

・2012 児童合唱組曲《やまぐちの子どもの歌》こわせ・たまみ作詩・岩河三郎作曲

・2012 児童（女声）合唱組曲 《きのう・きょう・あした》響敏也作詞・宮川彬良作曲

・2013 童声（女声）合唱組曲《あめつちのうた》林望作詞・上田真樹作曲／音楽宅急便委嘱

・2013 女声(児童)のための合唱組曲《キュイジーヌ（1557)》伊藤千鶴作詞・吉岡弘行作曲

・2017 少年少女と「まち」のための 9 つの風景《カンターレ！あかんたーれ》響敏也作詞・宮川彬良作曲

４．児童合唱における組曲の位置

（１）出版の背景

1970 年代から 1980 年代にかけて児童合唱組曲が数多く創作されているのは、新曲が必要とされたからに他ならない。「少年少女のための合唱組曲」が発表されていなかった時には、児童合唱団は女声を対象とした合唱組曲を歌わざるを得なかった。少年少女合唱団の団体数の増加と共に、少年少女のための合唱組曲が必要とされるようになった。また、少年少女合唱団が設立された当初は合唱技術が未熟だったが、合唱研や合唱祭などを通して技術が向上し、音楽的に高度な合唱曲が必要とされるようになったことも要因の一つである。合唱組曲は、テーマ性や演奏上の華やかさを強く打ち出すことができるという効果が大きいために、定期演奏会やコンクールの自由曲としての需要が高まり、制作・発表が増えたと考えられる。少年少女合唱団の合唱技術の向上は、作品に反映され、難易度の高い曲は、女声合唱曲としても使用された。活発な活動を展開している児童合唱団が、団体の特色（地方色）を出すために、委嘱作品を作曲者・作詞者に依頼することも多く、それらは楽譜として出版された。少年少女合唱のための合唱組曲の発行数と少年少女合唱団の団体数・活動の状況には相関関係があると言える。

1955～1975（昭和 30～50）年代は、我が国において児童合唱が一気に盛んになった時期である。ウィーン少年合唱団をはじめとする外国の合唱団の来日に触発され、各地で少年少女合唱団の創立が続いた。全国学校音楽コンクールの参加校は増加し、1957（昭和 32）年の第 24 回大会の小学校の部には 2529 校が参加し、参加校の数はピークに達した。

『みんなのうた』、『歌のメリーゴーラウンド』、『歌はともだち』といった児童合唱をメインとする全国放送番組が人気を集めた。児童合唱への関心は急速に高まり、団体数が増えていった。

少年少女合唱団の演奏技術が高まっていった背景には、演奏活動を認めて貰うために合唱祭や合唱コンクールなど、活動の場が各地で設定され、それらの機会を多くの団体が利用することによって、合唱祭や合唱コンクールが盛会となり、更に合唱団に入りたいと望む児童・生徒が増加し、合唱団の人数が増え活性化し、団体数も増える、という良い循環をしていたと考えられる。

（２）児童合唱と管弦楽のための組曲《えんそく》

《小さな目》や《えんそく》は、児童合唱組曲の最初期の作品である。《小さな目》や《えんそく》は、我が国の合唱組曲の草分けであると考えられる。《えんそく》をきっかけとして「少年少女のための合唱組曲」、「児童合唱組曲」という分野が定着したと考えられる。時を同じにして発表された湯山昭の作曲の《小さな目》は、朝日新聞掲載の子どもの詩の何編かを集めたものであり、文学的・音楽的な関連を持った一連の連作歌曲（組曲）とは言えないが、この２つの作品は、児童合唱のためにも成人合唱と同様の「合唱組曲」という分野が必要であるという位置を確立したと考えられる。

合唱組曲は、成人のための作品も、少年少女のための作品も、連作歌曲というまとまりがあり、大作であるという印象が強いので、少年少女合唱団の定期演奏会などで演奏されることが多い。組曲の中の一曲が合唱コンクールの自由曲として使用され、数多く演奏されてきた。ある合唱団の委嘱作品が人気を得て出版され、多くの児童合唱団に好んで歌われた例もある。需要の対象は少年少女合唱団のレパートリーである。従って児童合唱団の団体数、児童合唱団の活動状況と比例するのは当然のことである。ところが、大作であるがゆえに合唱組曲の演奏に際しては、ある程度以上の合唱団の団員数が必要とされる。構成人数が少ない団体では合唱組曲を演奏曲目として取り上げることができない。近年では少年少女合唱団の団体数の減少に伴い、出版されてから流通するよりは、必要に応じて印刷される受注生産とされているものが多い。需要が減少していることに他ならない。

５．終わりに

1932（昭和７）年に児童の音楽に対する趣味を養い、音楽教育の進展に資するという目的で、日本教育音楽協会 10 周年記念行事の一つとして「児童唱歌コンクール」が開催された。第１回目から第８回目までは、男女別に審査が行われていた。第７回大会では男子の部で、後に文部省の指定校となる仙台市立南材木町小学校が最優秀を受賞している。第

16 回大会より中学校の部が設立された。後に東京少年合唱隊を結成することになる長谷川新一が指導する紅葉川中学校が、本大会で最優秀を受賞している。戦後には参加校が急激に増加し、1957 年（昭和 32）年にピークを迎えている。全国学校音楽コンクールもまた、児童による合唱音楽の発展に大きく寄与してきた。

成人合唱、児童合唱ともに、合唱音楽の展開に欠かせないものは、①合唱団（歌い手)、②指導者（伴奏者を含む)、③楽曲（作曲者・作詞者）の３者と考えられる。これまで見てきたように、少年少女合唱団の団体数は、創立（設立）→成長（増加）→減少（淘汰）の道筋を辿り、現在は減少の時期となっていると考えられる。成長、発展の時代の背景には、この３者周辺の関係者の熱意、つまり、少年少女による合唱の振興を願い、力を尽くしてきた指導者たちを、周辺の熱意が支えていたとも言える。「周辺の熱意」とは、ラジオ・テレビ・レコード会社関係者（プロデューサーやディレクター)、保護者会、後援会、OB 会などである。

反対に、減少の背景には、①少子化、②子どもの興味・関心の多様化などが思い浮かぶ。減少傾向にある現在、少年少女合唱団の今後を考えたとき、

①合唱指導後継者の育成

②現在活動中の団体の次世代団員の育成

・団員募集　・練習時間　・活動内容の検討　・発表の場の設定　・魅力ある楽曲

などの多くの課題があると思われる。水準の高い演奏を可能とする団体の次世代団員を育成し、持続可能な団体として活動できるように、中心にある人々だけではなく、周辺の支援や協力もまた必要であると考えられる。我が国の児童合唱文化は、童謡を歌う団体から合唱団へと、短期間に急激に成長・発展を遂げてきた。少子化の現在、これから後の団体数増加は期待できないとしても、合唱団活動が堅実に成長していくことが望まれる。

本稿において検証できたのは概要であり、現時点における児童合唱団団体数、少年少女合唱連盟加入団体数、大会・合唱祭への参加団体数の把握など不十分なまま終わらざるを得なかった。今後の課題としたい。

【主要参考文献】

・『合唱事典』（1977）音楽之友社
・『新訂合唱事典』（1983）音楽之友社
・『日本童謡事典』（2006）東京堂出版
・安藤美紀男（1977）『児童文化』朝倉書店
・池田小百合（2003）『子どもたちに伝えたい日本の童謡』実業之日本社
・井手口彰典（2018）『童謡の百年』筑摩選書
・長田暁二（1994）『童謡歌手からみた日本童謡史』大月書店
・海沼実（2003）『童謡心に残る歌とその時代』ＮＨＫ出版

・鎌田典三郎（1983）『実践に即した歌唱指導の手引き』自費出版
・上笙一郎（1976）『日本の児童文化』国土社
・河合隼雄／阪田寛夫／谷川俊太郎／池田直樹（2002）『声の力ー歌・語り・子ども』岩波書店
・菅忠道（1968）『児童文化の現代史』大月書店
・河口道朗（1991）『音楽教育の理論と歴史』音楽之友社
・佐野美津男（1965）『現代にとって児童文化とは何か』三一書房
・柴田克彦（2017）『山本直純と小澤征爾』朝日新聞出版
・周東美材（2015）『童謡の近代ーメディアの変容と子ども文化』岩波現代全書
・園部三郎／山住正巳（1962）『日本の子どもの歌ー歴史と展望』岩波新書
・谷悦子（2007）『阪田寛夫の世界』和泉書院
・中田喜直（1993）『音楽と人生』音楽之友社
・長木誠司（2010）『戦後の音楽ー芸術音楽のポリティクスとポエティクス』作品社
・戸ノ下達也／横山琢哉編著（2011）『日本の合唱史』青弓社
・内藤啓子（2017）『枕詞はサッちゃん』新潮社
・滑川道夫／菅忠道編著（1972）『近代日本の児童文化』新評論
・畑中圭一（2007）『日本の童謡ー誕生から九〇年の歩み』平凡社
・東京少年少女合唱隊 LC 基金（2001）『歌おう東京少年少女合唱隊 50 年の挑戦』朝日新聞社
・「児童合唱と管弦楽のための組曲《えんそく》」日本コロムビア COCE-35393 オリジナル版：1970 年発売の再発売（2009）指揮山本直純管弦楽新室内楽協会合唱ＮＨＫ東京児童合唱団（元東京放送児童合唱団指導古橋富士雄）（CD）
・井上博子（2008）修士学位論文「我が国の少年合唱団の現状と課題」福岡教育大学大学院音楽教育研究科修士課程
・「ライジングー少年合唱団ー天使たちのコンサート」（1986）新書館

注：

1) （1967）『合唱事典』音楽之友社、執筆者：長谷川新一、p.554.
2) （1983）『新訂合唱事典』音楽之友社、執筆者：関屋晋、p.557.
3) 同上 pp.557-558.
4) 筆者の調査によれば、ここで言う少年合唱団は、設立年度からみて、現在も尚活動を続けている我が国の少年合唱団〈フレーベル少年合唱団（東京都）1959（昭和 34）年設立、グロリア少年合唱団（神奈川県）1959（昭和 34）年設立、広島少年合唱隊（広島県）1960（昭和 35）年設立、呉少年合唱団（広島県）1961（昭和 36）年設立、栃木少年合唱団（栃木県）1962（昭和 37）年設立、桃太郎少年合唱団（岡山県）1962（昭和 37）年設立、の 6 団体を含み、他は、現在は活動を休止、または解散した幾つかの少年合唱団を指していると思われる。
5) 日本童謡事典、pp186-187.
6) 周東美材（2012）「童心の〈ユートピア〉：鈴木三重吉の児童歌劇学校の構想」東京音楽大学研究紀要 36、p.51.
7) 井手口彰典（2018）『童謡の百年』筑摩選書、pp.60-61.
8) 畑中圭一（2007）『日本の童謡：誕生から九〇年の歩み』平凡社、p.286.
9) 長田暁二（1994）『童謡歌手からみた日本童謡史』大月書店、pp.58-59.
10) 同上、pp.59-60.
11) 河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹（2002）『声の力ー歌・語り・子ども』岩波書店、p.101.
12) 畑中圭一（2007）『日本の童謡：誕生から九〇年の歩み』平凡社
13) 鎌田典三郎（1983）『実践に即した歌唱指導の手引き』自費出版、pp.259-260.

[14] (1986)《ライジングー少年合唱団－天使たちのコンサート》新書館 p.36.
[15] 1968.3.27.西日本少年少女合唱連盟第 1 回発表会プログラム p.2.
[16] 同上、pp.3-4.
[17] http://www.geocities.jp/webakky/kbsg/data/index.htm
[18] 1983.3.27.西日本少年少女合唱連盟演奏会プログラム：2017 年度大会資料
[19] 戸ノ下達也／横山琢哉編著（2011）『日本の合唱史』青弓社 p.217.
[20] 児童合唱と管弦楽のための組曲『えんそく』》日本コロムビア COCE-35393 オリジナル版：1970 年発売の再発売（2009）指揮山本直純管弦楽新室内楽協会合唱 NHK 東京児童合唱団（元東京放送児童合唱団指導古橋富士雄）、CD 解説書 p.11.
[21] 同上、p.7.

※小論は 2019 年 2 月 23 日音楽教育学会九州地区例会における口頭発表「我が国の児童合唱文化形成に関する一考察―児童合唱と管弦楽のための組曲《えんそく》を通して―」を基に加筆したものである。

[A Study on the Formation of Children's Choral Culture in Japan

－Through changes in the number of publication of children's choral suites－]

[INOUE, Hiroko・小田原短期大学保育学科准教授・音楽教育学・欧米文化学専攻]